高齢救急患者に対する
救急科病棟チームの取り組み

～専属看護師の活動報告～

仙台市立病院　渥美真弓　星智美

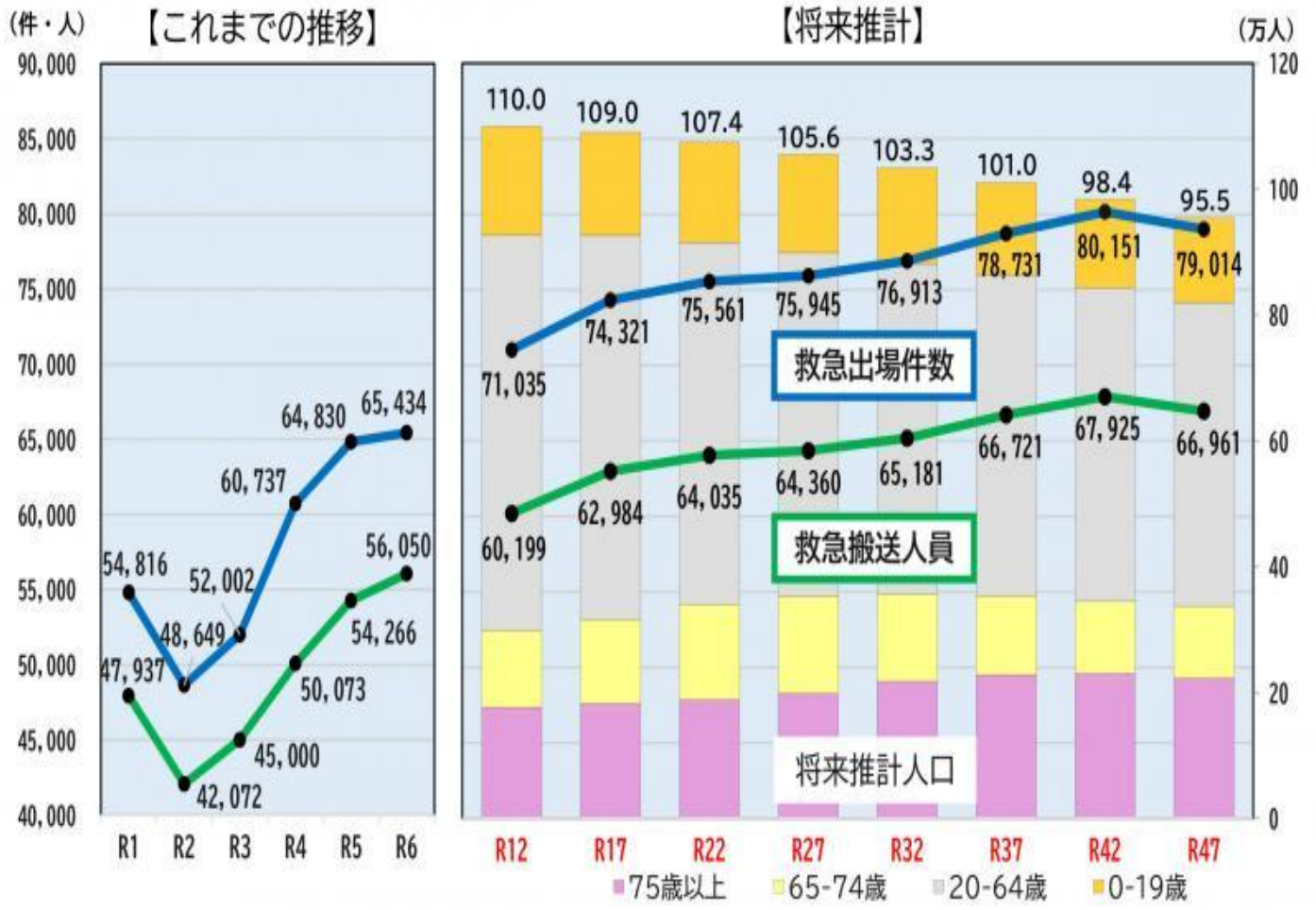
救命救急センターの役割

・高度急性期医療機関
としての役割

三次救急
小児救急
身体合併症精神科救急

・運営基本方針
「救急車は断らない」

救急搬送患者の将来推計と当院の受入れ状況



仙台消防局管理課　https://www.city.sendai.jp/kikakukoho/shouraisuikei/shouraisuikei.html

❖令和6年度

仙台市の高齢化率　29.5%

救急搬送患者は年々増加しており、

高齢者の割合も増加している

当院の受け入れ状況

救急外来受診者総数

14984人/年(41.1人/日)

救急車受入れ台数

7997台/年(21.9台/日)

入院患者数

5776人/年(15.8人/日)

高齢救急患者の特徴

・症状がはっきりしない
　　認知機能の低下
　　基礎疾患がたくさんある
・診断が複数科に跨る
・急性期症状が引き金になり、せん妄になりやすい
・社会的背景に問題を抱えていいる場合が多く、退院・転院調整に時間がかかる

救急科で入院
生活に不安を抱えたまま退院

救急科の問題点

医師
・病棟担当医が日替わりの
　ため患者把握が不十分
・病棟との連携不足
・退院・転院調整の遅延

看護師
・病棟担当医が日替わりで
　治療方針が不明瞭
・指示が出ない
・医師との連携不足
・業務の煩雑化

・病棟担当医師を固定化
・精神科医師、MSWの参加
・専属看護師の配置
・チームによる総合的な
　治療診断

救急科病棟チーム

＜チームの目的＞

- ❖多職種チームによる毎日の回診で、問題点、治療方針を共有する
- ❖総合診療的な診断・治療を提供し早期回復を目指す
- ❖早期からの退院支援介入により転院・退院の迅速化を図る

専属看護師は

病棟看護師と医師の調整役

専属看護師
1名

＜メンバー＞

病棟専任救急科医師　1名

精神科医師（兼務）　1名

吸器内科（兼）スタッフ医師　1名（2回/週）

救急科専攻医　1名（1ヵ月毎ローテーション）

研修医　1～2名（1週間毎ローテーション）

MSW　1名（兼務）

退院支援看護師　1名（兼務）

救急科病棟チームと専属看護師の活動

＜主な活動＞

8:30～　早朝カンファレンス（新規入院・ICU・HCU入院患者）
　・医師と治療方針や検査の予定等、情報共有

9:30～　病棟回診（一般病棟）
　・回診時の患者状態や追加情報を病棟看護師と共有
　・病棟看護師から医師への確認事項の伝達

11:00～　定期カンファレンス（一般病棟入院患者）

14:00～　一般病棟カンファレンス
　・患者処置（PICC・検査）の介助
　・IC同席・患者面談
　・退院調整、サマリー入力

16:30～　夕回診
　・未入力指示の確認と医師への伝達

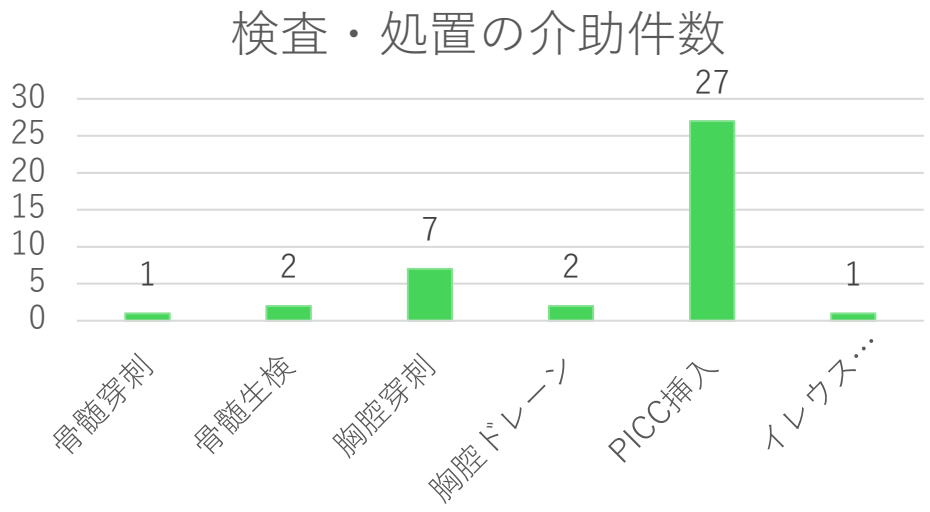
上記に加え、地域連携の関係構築（病院訪問）等も活動に含む

救急科病棟チームと専属看護師の実績

❖救急搬送件数と救急科入院件数

項目	2023年度	2024年度
救急科入院件数	1056	1150
内65歳以上の入院件数	629	701
平均在院日数	8.9日	8.2日
15日以上の入院患者総数	207	191
内）65歳以上	183	157
参考）早期転院搬送件数	0	81

❖専属看護師



・転院予定患者のサマリー入力

・退院支援、リハビリカンファレンスへの参加

救急科病棟チームの成果

＜チームの目的＞

- ❖多職種チームによる毎日の回診で、問題点、治療方針を共有する
- ❖総合診療的な診断・治療を提供し早期回復を目指す
- ❖早期からの退院支援介入により転院・退院の迅速化を図る

↓

病棟担当医師を固定化することにより、医師と連絡が取れない、指示が未入力といった問題が減少した。多職種と連携し、診療を進めることで、問題の明確化が図れ、多職種の早期介入が可能になった。

専属看護師の課題

- 今回、専属看護師には、救急看護の経験のある副師長を配置した。回診、処置時の医師のサポートの他、医師のタイムスケジュールを管理し、患者に不利益が無いように業務調整できたのは経験値によるところが大きい。
- 医師、多職種とのタスクシフトを考えると、より機能的に活動するためには、専属看護師が特定行為を実践できることが望ましい。
- 専属看護師は処置の介助やサマリーの入力等、かなりの数の病棟看護師業務を　代行していたため、業務整理が今後の課題である。

ご清聴

ありがとうございました